
ある男の視点

諏訪朱音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある男の視点

【Nコード】

N7776H

【作者名】

諏訪朱音

【あらすじ】

ある男の狂気に満ちた視点です。完結しました。ありがとうございます。

夜明

東の空が白ける頃、僕は目を覚ましてしまつ。

僕の日課。

それは夜明けに起きて彼女が薄紅色に染まるのを見ること。

艶のある黒髪は赤みがかかり。

白く透き通る肌はほんのり赤く染まる。

この部屋で一番大きな窓から溢れる薄紅色の光が彼女を染めるとき、僕は昏い破壊衝動を抑えることができる。

薄紅色に染まる彼女が自身の血でまみれた様に見えてしまうのだ。それを見て

「僕が手に掛けた」

と僕を騙すのだ。そして、だまされる馬鹿な僕は歓喜に震えるのだ。

彼女は赤が似合う。夜明けに僕を魅了する儂い彼女。

彼女が嫌いなのではない。むしろ愛してる、も過言ではない。だからこそなのだろう。

彼女の全てを手に入れたいのだ。

生きているあいだはもちろんだ。

笑って、泣いて、怒って、

空が闇に包まれた間だけ、月明かりに照らされるその顔も、
全て僕のものだ。

だけど貪欲な僕は彼女の死をも手に入れたい。
僕の手で彼女が最期を迎えるその顔が欲しい。

そのとき、彼女はどんな顔をするのだろうか。

悲痛に満ちているのか。

苦痛に歪んでいるのか。

それとも幸福そうに目を細めるのか。

とても、見てみたい。

彼女は怒るだろうか。

呆れるだろうか。

それとも笑って受け入れてくれるだろうか。

こんな、馬鹿でどうしようもない僕の全てを。

それは罪だろうか。

そう思うことは罪だろうか。

笑って、泣いて、怒って、感じてそのあとで。

君の全てを奪っても良いですか。

夜明（後書き）

『中毒』に入れようかと思いましたが、よく読み返せば、主人公、少女じゃなかった。ということ。他の更新遅くてすいません。

日食

夢。

僕の夢。

それは、子供たちが描く無垢なそれではない。

僕の夢、いや願望はただひとつ。

真昼の夜に彼女をここから連れ去る事。

誰も居ない、どこか遠くへ。世界の果てへ。僕と彼女の二人きり。

そして、たった二人の狭くて美しい世界で笑って、泣いて、怒って、感じるんだ。

明け方に彼女の赤く染まる肌を眺め。

夕方まで穏やかに過ごし。

夜の帳が降りたなら、肌をさらして感じ合おう。

きつと、穏やかで緩やかな優しい毎日が送れるだろう。

とても、魅力的だ。

僕は誓える。彼女への永遠の愛を。

彼女はどうかだろう。こんな僕に愛など誓ってくれるのか。それも、永遠など。

怒るだろうか。呆れるだろうか。それとも、笑って受け入れてくれるだろうか。

でも。

もし、彼女に拒絶されたら。
きっと、正常ではいられない。

僕には彼女だけなんだ。彼女が僕の全て。

もし、彼女が僕以外を選ぶのならば、残念だけど、無理矢理に連れ去ってしまうよ。

彼女の意志など関係なく。

きっと、甘くて穏やかな毎日は送れないだろう。

僕を拒絶し、僕を見る事もないだろう。そういう人だから。

それでも、彼女のいない世界に耐えられるとは思わない。

でも、僕は心が広いから、彼女限定でとてもとても優しいから。
選択肢をあげる。

僕に連れ去られて生きるか、この地で僕に殺されるか。

前者ならこの世で生きて、後者なら彼女を殺して僕も追いかけてよう。

僕から離れるという選択肢はあり得ないけれど。とても譲歩して
いる。

だから、答えを頂戴。

彼女は生きる事を選んだ。

遠くへ。知り合いなど一人もない場所へ。

僕と彼女の二人きり。

僕は彼女に永遠の愛を誓う。

彼女は僕に永遠の愛を誓ってくださいか。

黄昏（前書き）

エログロです。ご注意ください。ちなみに作中の「証」はフラ
ンツ・グリルバルツァーさんの“接吻”1819年作品です。

黄昏

黄昏。

それは、その日の終わり、逢魔が時、誰そ彼。
生命いのちの終焉、世界の終わり。

全てが眠りにつく準備期間。
全てが終わりに近づくその瞬間。

彼女は尋ねる。何が悲しいの、と。

僕は答えに困る。悲しんでなどいないから。

太陽が去り、夕焼けが名残とばかりに西の空を彩る。

何も感じない。ただ知っているのは、もう二度と見る事のない景色である事。

再びあの太陽が昇る頃、僕たちの身体は、太陽の輝きとは別に赤く染まって冷たくなっている事を。

ずっと持っていた希望。

ずっと待っていた願望。

ずっと秘めてきた欲望。

さらけ出してみようと思う。

ゆっくり近づく僕を彼女は微笑を浮かべて待つ。その微笑はとも清らかで、美しい。

僕もつられて笑うけれど、彼女のようにには笑えていない。僕のは歪んでいるから。

僕は思う。

逢魔が時を知らないのか。命が惜しければ速く逃げろ、と。

彼女はそれすらも承知でここにいるのかもしれない。

あの日、突きつけた不条理で理不尽な選択をした彼女は、もう、僕の全てを分かっているかもしれない。

謝罪と、とびきりの感謝を。

永遠の愛と、永遠の共生を。

僕は彼女に跪き、手の甲にキスを送る。 忠誠の証。
立ち上がり、白く美しいその頬を両手で包み、額へのキス。 . .

- . . . 友情の証。

そのまま手をあごにやって、頬にキス。 厚意の証。

唇に、優しいキスを。 愛情の証。

唇から離れて、閉じられた瞼にも。 憧憬の証。

手首を掴み、舌で掌までなぞって。 懇願の証。

また少しだけ舌で手首までなぞって、最後のキス。

欲望の証。

僕の正気はここまで、後は狂気である事を示す為に鎖骨に舌を這わせ、僕のお気に入り、鎖骨のくぼみに吸い付いた。

そして、絶頂を迎えた彼女の喉を切り裂いた。

最後に彼女はやっぱりするのね、と残念そうに笑った。抵抗はなかった。

そしてその後そのナイフで僕自身の喉も裂いた。

赤い、液体が流れる。

命の証、痛みの色、全ての源となるその液体に浸って僕の意識は闇に溶けた。

黄昏（後書き）

三部作完結編です。後もう一話、載せようと思っています。よろしければ、おつきあいください。

月食（前書き）

思った通りに書いたら意味不明に・・・ごめんなさい。そして、おつきあいありがとうございます。

月食

それは、ある男の我が儘だった。

その人は私を愛しているらしい。

私には分からない。誰よりも私が私を嫌っているのに、彼は私が好きだという。

どこが良いのか分からない。理解できない。

でも、彼は本当に嬉しそうに私の隣にいるものだから、私はそのまま放っておいた。

はじめはまともだった。ごく普通の、恋人同士の愛情表現。

身体をつなげる事、心をつなげる事。とても気持ちの良い事。

でも彼は、それだけでは足りないようだった。

まるで、獣のように、私を捕食の対象としてみているような気がした。

私という存在を手に入れてまだ足りていないらしかった。

だから、このまま放っておいたら何をするのか気になった。

実験動物を見るような感じで彼を観察した。

そこから分かる事はほとんど無かったけれど。

彼の欲望が徐々に、解き放たれているような感じがした。

彼は自分に忠実だった。

私はそれを好ましく思った。

彼が遠くへ行きたいと言ったとき、私は命の終焉を感じた。

もうすぐ、私は彼に殺される。

不思議と怖くはなかった。

いつものように身体をつなげる時間。

どこか、空気が冷たく、張り詰めていた。

いつものように熱い時間。私が上り詰めたとき。

銀に光る刃を見た。

彼が私を望むなら、私は私のすべてをあげる。

だから、あなたも。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7776h/>

ある男の視点

2010年10月14日20時32分発行